

徳川義親と聾啞界

桜井 強

日本聾史学会事務局長 deaf@naa.att.ne.jp

はじめに

徳川義親は、わが国の聴覚障害児教育支援や聴覚障害者福祉活動としての功績が高く評価されている。なぜ、彼は聴覚障害に関わっていたのか。徳川義親の手によって聴覚障害教育と福祉に関わってきたのは事実である。このことを氏の略歴を知っておくべきである上、引用しておきたい。

徳川義親の経歴

1886年(明治19)10月5日に元越前藩主松平春嶽の五男として小石川区水道町35番地に生まれる。
1892年(明治25)11月1日、学習院初等科入学
1908年(明治41)尾張徳川家の徳川義礼の養子のち、徳川義親と改名。従五位に叙せられる。
1908年(明治41)東京大学史学科入学。
1909年(明治42)11月、尾張家の米子と結婚。
1911年(明治44)7月、東京大学史学科卒業。
1911年(明治44)9月、東京大学生物学科入学。
1911年(明治44)10月、貴族院議員就任。
1914年(大正3)7月、東京大学生物学科卒業。
1918年(大正7)徳川生物学研究所設置。
1921年(大正10)マレー半島へ転地療養。
1923年(大正12)徳川林政史研究室設立。
1927年(昭和2)4月、貴族院議員辞任。
1930年(昭和5)6月、聾教育振興会に2万円寄付。
1931年(昭和6)12月、財団法人徳川黎明会設立、貴族院議員復帰。
1942年(昭和17)1月、マレー軍政顧問就任。
1942年(昭和17)8月、昭南博物館長・植物園長就任。
1946年(昭和21)8月、公職追放。
1949年(昭和24)4月、徳川林政史研究所長就任。全日本聾啞連盟総裁就任。日本猟友会会長就任。
1951年(昭和26)8月、公職追放解除。

1956年(昭和31)名古屋市長選に立候補、落選。
1976年(昭和51)9月6日、死去。(享年89歳)
日本経済新聞社編 「私の履歴書」-20-
昭和39年2月1日発行 P181~P182

私は聾教育に関係していた。大正14年、私のところに北海道に漁場を持つ西川吉之助さんが娘のはま子さんをつれてたずねてきた。はま子さんは全くつんぼである。つんぼは当然、啞になるはずだ。それが話すのだから私はびっくりすると同時に、涙が出てきた。西川さんははま子さんがつんぼと知ると啞にしたくないので、アメリカに行き、口話法を研究してきた人である。口話法とは手真似でなく、相手のしゃべることを顔や口の動きで見わけ、声を出して会話させる法である。西川さんご自分ではま子さんを教育し、とうとう高等女学校を卒業させるまでにした。当時、全国の聾学校は手話法(手真似)で教育していたが、西川さんはそれを口話法にかえようとはま子さんをつれ、自費で全国を行脚していた。私はこの話に感激して、聾口話普及会を設立、この運動を助けることにした。これには東京の川本宇之介、名古屋の橋村徳一の両校長が熱心に働いてくれたが、今日ではこの運動が功を奏して、全国の聾学校が口話法をとるようになっている。だが、西川さんは資産のすべてを消費し尽くした。そして、この聾教育界の大きな恩人ー西川さん親子もすでにこの世に亡い。私は今も西川さんの志をつぎ、全日本聾啞連盟に関係して及ばずながらその福祉の仕事に尽力しているが、なんとかして日本の聾教育の革新を行なったこの不遇な聾啞教育家の功績を世に伝え、世に残したいと思っている。今日、聾教育に関係している者、口話教育を受けた人々は西川さん父子の愛の賜物を心にしっかりと、とどめておかれたい。そして顕彰する方法を考えようではないか。

徳川義親自伝 「最後の殿様」講談社

昭和 48 年 9 月 20 日発行 P109~P110

【オシの娘と父との会話に涙する】

大正 14 年のある日、滋賀県近江八幡の西川吉之助さんとオシの娘の浜子さんが訪ねてきた。オシがものをいうのは奇跡といわれていた時である。浜子さんは全聾であるのに、父子のあいだの会話は普通の人と変わりはない。ぼくは本当にびっくりして涙が出てしまった。浜子さんは子どものころ病気で耳が聞こえなくなった。西川さんは、娘がつんぼでもオシにはしたくない、なんとか話ができるように育てたいと、親の一念で苦心惨たんし、アメリカにも研究に行き、自分で口話法をみだして娘を教育した。相手の顔の動きをみてわかるように、発声を教えて、小学校の課程も親の指導で終り、高等女学校の入学試験もパスした。同級生が親切に援助してくれて、女学校も無事に卒業した。西川さんはこういうのである。「わたしの娘ができるのですから、ほかのひとの子どもができないことはありません。日本の聾啞教育は、手話法(手真似)ばかりでいけません。オシが電車のなかで手まねで話をするのは気の毒です。見ているものが笑ったり馬鹿にします。オシは自分の責任ではないのに、どれほど劣等感を持つことでしょうか。聾教育界も手話法が唯一の教育法と思っています。口話法のあることを全聾啞学校に知らさなければなりません」それを聞いて、ぼくは西川さんを支援することにした。西川さんは娘をつれて、自費で全国の聾啞学校をまわり、口話法の実際を示して宣伝した。その結果、たちまち全聾啞学校が口話法に転換した。昭和 6 年 1 月、財団法人聾教育振興会ができたが、こんどは学校の先生方が、自分の点数を稼ぐことが主になって、聾者の福祉を忘れてしまった。ぼくは全国聾啞教育連盟を脱退した。いまは聾啞者自身がつくった全日本聾啞連盟の総裁である。

手話は心 川淵依子著 全日本聾啞連盟

昭和 58 年 3 月 1 日発行 P255~264

手話賛美 川淵依子著 サンライズ出版

2000 年 10 月 1 日発行 P414~425

【徳川義親さまのこと】

徳川義親さまのことを書きたいと思う。尾張名古屋の殿様であった徳川様は、はからずも滋賀県立聾話学校創立者である西川吉之助先生と知り合われた。己が娘はま子さんに口話法教育を施して、ものの見事に成功され、我が国口話法の我が国口話法の生みの親ともいえる西川先生に対して力強い協力者となられた。この事が徳川さまをろうあ者とのかかわりへ導いていったことになる。徳川さまはろう教育振興会会長、後に全日本聾啞連盟総裁となられた。私が徳川さまのお名前を耳にしたのは、まだ小学生の頃であった。父と母との会話の中で時折、徳川さまという名が出た。私はわけがわからないままに、偉いお方だと思っていたものだ。やがて、おぼろげながらもわかってきたのは、その方が今までは父と反する考えをもっていられたが、父の思っていることに対し漸くご理解いただけただということだ。私の臉にやきついているのは、そのことについて父母が涙を流して喜びあっている一こまだった。「長い間、本当にご苦労さま。よくここまで、がんばってくださいましたね」と、というような言葉が母の口から出たようだった。私は、ともかく、父も母もうれしいことなのだと思っていた。家の中にあつた暗いとぼりがとり払われたような、そんな感じをうけたものだ。徳川さまというお方は本当にありがたい方なのだとも思った。昭和 15 年 11 月 16 日、父の学校の恒例となっている「手話劇の夕」が、大手前の国民会館で開催されるのだが、それに徳川さまが東京より来られるということで、我が家の空気は何となく、はずんでいた。その頃私は、女学校の 5 年生になっていたの、たずねるまでもなく、父母の会話の中に、父の苦労がやっとうれわれかけていることを感じていた。毎年のことだが、その年、母は特に切符を売ることに精を出しているようだった。母もうれしいのだなあとは私は見た。しかし、当日の朝、母はみまかった。父は母の死を秘めて大会に出るのだ。この感激と喜びにひたることのできなかつた私の家は、そうして父は、それを機に家庭的に淋しい日をおくることとなった。徳川さまを思うと私の思いは母の死につながる。しかし、母は喜びの中に死んでいった。思いようでは幸せな人だったともいえる。そう思えば徳川さま

は本当にありがたいお方である。昭和 42 年、『指骨』を、徳川さまに贈った。時代は変わっているとはいえ、私のような古いものには、それこそ、おそるおそる郵送したのだったが、うてばひびくように受け書が届いた。おどろいた。私にとっては思いもよらなかったことだし、というよりその内容におどろいているのだ。「御著書、まことに有り難う御座います。—————本当に感謝しています。」徳川義親

昭和 14 年、————西川先生の悲しい死、それは縊死であった。その翌 16 年、あらためて、はま子さんは父を訪ねた。徳川さまの口添えもあってのことだが、囑託職員ということで迎えられている。はま子さんの手記の一部に、「私は口話法で————口話法のためにつくしたのであった。」私は一度徳川さまという方にお目にかかりたいものだと思っていた。いただくお便りの書体からして、やさしい方だろうと思っていたし、また、そのやさしい書体の中にひそむ内面のいさぎよさがしのばれた。なつかしい方に思えてならない。父や母の苦悩をぬぐってくださった方なのだ。去りゆく母に安堵をあたえてくださった方なのだ。母は大会で徳川さまにお目にかかれることを待ちわびていて果たさず逝ったのだ。私は母に代わってお礼が言いたいとも思った。「お手紙拝見しました。—————昔の話をゆっくりしましょう。」徳川義親

私が目白の徳川邸を訪ねたことは言うまでもない。まことに、おおらかな方であった。純粹な方でもあった。さすがにお殿様だと思った。「当時、私は口話法こそ本当のろう教育だと思っていましたから、そうすなりと、お父さんのおっしゃることを、うけとめることはできませんでした。だから二人は机を叩いて激論をかわしました。あのように激しく話し合ったことはそれまでにありません。お父さんは私のことを、“これほど申しあげてもおわかりいただけないとは、失礼ながらあなたさまは馬鹿殿さまです”と、言われたのです」私は動悸に胸が苦しく顔が赤らむのをかくしきれなかった。「まあ……」戦前の侯爵さまに対して何と失礼なことを、父も失礼だとは知っていた、だが言わずにはいら

れなかった必死の父のようすがうかがえるのだ。「本当に申しわけございません」「いや、それでよかったです。私は目が覚めたのです。そうして私は負けたのです」なんと、さすがらしい言葉として私の耳に入ったことだろう。昭和 50 年、名古屋において全国ろうあ者大会があった。徳川さまは、ご自分の地元での大会であり、ご出席なさりたかったのであろう。ご老体をおして、全日本聾唖連盟総裁、大会総裁のお立場としてのご出席であった。そうして、これが最後の大会ご出席となった。この時の式辞の中に、「『足を知って、以て自ら誠しむ』と、いう言葉がある。すべてのことに謙虚に心がけたいものである。口話法の創始者西川吉之助さんと娘のはま子さんを紹介された時、私はすっかり感心してしまった。当時のろうあ学校は全部手話法ばかりであったが、口話法でこのくらいにものが言われるのだから、各聾唖学校でも考えてもらいたいと西川さんは、全部自己負担で全国に宣伝したいから文部省もそれを認められたいと全国行脚をやられた。ところが、これは薬がききすぎて、やがて殆ど全聾唖学校が口話法を採用してしまった。そうして従来手話法で育った卒業生を口話法教育の邪魔になるからという理由で学校へ来ることを禁止し、福祉の仕事もやめてしまった。これは、ろうあ者の為でなく校長、先生たちの点数をかせぐ為なのであった。その頃私は大阪に行ったので大阪市立聾学校に高橋先生を訪ね、口話法と手話法について議論した。すべての学校が口話法になったのに高橋校長は口話法と共に手話法も大切であるとして、むしろ孤塁を守っていたのである。高橋校長と議論した。負けてたまるかと、喧嘩腰の勢いであった。しかし聞いているうちに、考えると私の言うことより筋が通っている。私は突然立ち上がって『負けたあ』と、怒鳴ってしまった。高橋さんは、びっくりしてきょんとしていた。『私は負けました。あなたは経験者、私のは机上の空論です。私はご指導に従います』と、言って手を握った。高橋さんは正に情熱の人、夫人が亡くなられた時も、涙をこぼしながらも学校の会に出て来られて世話をしておられた……」昭和 33 年 1 月 9 日、父は他界した。すでに久しいというのに徳川さまの胸の中には、ま

だ鮮明に父が生きているのだと思った。もう、父の名を口にする人は、ほとんどないと思っていたのに、この名古屋大会に残して下さった式辞。私は心から拝む気持ちだった。50年5月の名古屋大会が終わって6月23日付、「この21日に——やりがいのある仕事。」徳川義親手話劇をご覧になって——徳川さまの最後となった便り、「人は一代——楽しく生きてゆきましょう。」徳川義親

忘れやしないと、言ってく下さった徳川さまは、もういらっしゃらない。徳川さまのことも知らない人ばかりになるだろうか。やはり私は日本の聾教育の一つの歴史を知っていてほしいと願うために、書きのこさねば。このほど、滋賀県ろうあ協会の元役員が、「これは、昭和47年、学校創立者の西川先生の遺徳讃えて記念像の建設を計画した時、徳川さんからいただいた葉書です。はからずも今日まで、私が所持していましたが、これは依子さんにお渡ししておくほうがよいと思いますから」と、くれた。宛名は、西川——御中、となっている。「西川さんの像、——いろいろ有難う御座います。」

徳川義親

私に、この一葉の葉書をくれた意味がよく分かった。そうして、その心づかいを感謝している。私は、このようなものが来ていたとは夢にも思わなかった。まして個人宛のものでもないのだ。かつては口話の西川、手話の高橋と相反する道をゆくものとされ、いまだに、手話をすることを不満に思っている人もあると聞く。この滋賀の学校に、一ばんの協力者であった徳川さまが、このようなものを出されていたとは。私に宛てたものだけではなかったのだ。西川先生の口話法教育に対する献身と愛情は素直に高く評価されているのだが。我が国のろう教育史の中で、何のてらいもなく、公平に見て来られたお方は、おそらく徳川さまお一人ではなかっただろうか。

聾教育百年のあゆみ 財団法人聴覚障害者福祉協会 昭和54年12月15日発行 P105~106

【異色の催し 首相官邸で懇談会】

日本聾口話普及会を結成した川本、西川、橋村らは精力的な活動をつづけていたが、さらに事業の拡充をはかるため昭和6年に財団法人

「聾教育振興会」へ発展的改組をした。その創立懇談会が前年の昭和5年6月6日に首相官邸ボーリングルームで開かれた。首相・浜口雄幸の特別の計らいによるもので、田中文部大臣をはじめ2百余人が出席し、聾児の実演も披露された。首相官邸がこの種の催しにつかわれたことは、後にも先にも例がない。司会をつとめた川本も、「首相官邸におけるかかる会の創立運動、または協議会としては未曾有であり、将来もおそらくは決してみることができないであろうと思われるが、実にこの光栄は本会の永久に忘れることの出来ないことである」と、その感動をのべている。日本聾口話普及会の会長は、岡田和一郎から徳川義親にかわっていたが、徳川はそのころ何度か貴族会館に朝野の名士を招き、聾教育についての認識をひろめる催しを開いていた。懇談会の会場に首相官邸が提供されるについてはおそらく徳川の働きかけによるものではなかろうか。財団法人聾教育振興会の発会式は、昭和6年4月27日に華族会館でおこなわれた。宮内大臣・一木喜徳郎、内務大臣・安達謙蔵、田中文部大臣が祝辞をのべ、会長に徳川義親が推され、理事に西川、橋村、樋口長市ら七人をあげ、川本は常務理事に就任した。顧問には洪沢栄一らを、また評議員には吉田茂、鳩山春子、颯田琴次、ミセス・ライシャワーら50人をこえる豪華なメンバーの役員をきめた。

天窓 特殊教育に生きて50年

美馬常雄 平成5年3月20日 P229~232

【忘れ得ぬ方々に感謝して 尾張の殿様 徳川義親元侯爵】

徳川義親侯と聾学校教育のつながりは大正末期に遡る。徳川侯は訪ねて来た西川吉之助氏と令嬢の浜子さんを迎え、聴覚障害の浜子さんが話すのを見て感動した。奇跡を目のあたりにしたとその時の感動を記しておられる。大正14年11月「日本聾口話普及会」が結成され、徳川侯爵は顧問総役に推され、昭和3年長く空席となっていた会長に就任された。この会は昭和6年1月財団法人聾教育振興会と改組したが、これは現在の「財団法人聴覚障害者教育福祉協会」の前身である。戦前、徳川侯は聾口話教育の普及と振興に大変ご努力下さったのである。昭和

41年6月、札幌での第15回全国ろうあ者大会に、全日本聾唖連盟総裁としてご出席下さった折、式辞として昔を偲んで次のように述べられている。「秩父宮紀殿下をこの北遠の地、札幌にお迎えして第15回全国ろうあ者大会を開くことが出来たのは、まことに名誉であり、有り難いことです。今日、この北海道の大会に参列して、私には感慨に堪えないものがあります。思い廻らすと41年前、大正15年。西川吉之助さんがお嬢さんの浜子さんをつれて訪ねて来られました。私はそこに奇跡を目の前に見せられたのです。聾がものを言う。西川さんの愛情が聾を無くしたのだと涙が止められませんでした。西川さんが口話法の教育に火を点じのが契機となって、聾教育は急速に進歩しました。西川さんは滋賀の方で、忍路に鯉の漁場を持つ資産家でしたが、聾教育の為に、又聾者福祉の為に産を擲って尽くされました。それから不幸にも忍路の漁場では3年間たて続けに鯉が全く獲れなくなりました。そのためいよいよ圧迫されたのですが、聾者に対する情熱は少しも失われず、命ある限り倒れるまで尽くされたのでした。或る年、私は西川さんと北海道の聾学校を回って忍路に着いた時、全く寂れ果てた漁場を案内されましたが、どんなに寂しい思いをされた事であったろうと察していましたが、併し、西川さんは朗らかに笑って「運命ですよ」といったきりでした。今日のこの大会を西川さんと浜子さんに見せてあげたいと思っています。皆さんも新しい聾教育の始祖としての西川さん、浜子さんの事、時に思い出してあげてください。私は北海道で開かれた大会に出席して、感慨に堪えないのです。寂しさと、大きなよろこびと。」

第24回全国ろうあ者大会

昭和50年4月29日～5月6日

財団法人全日本聾唖連盟 P11

【式辞】

財団法人全日本聾唖連盟総裁

大会総裁 徳川義親

心身に欠陥のある事は不幸なことだが、心身の健全な人は、それで果して幸せなのであろうか。やはり不幸な生活をしている者も相当多い。思えば人の幸、不幸は持って生まれたものでは

なく、生まれてからの人の生き方による。私の孫も亦、正に生れつきの精神薄弱者である。私達は一緒に住んでいるのだが家族一同、至ってのどかに、不幸も不安もおぼえないでいる。これは殊に母親の心がけにある事で、愛情と万事に常識的な行動、取扱い方によるものである。要するに幸せに生きるのは、誰でも、何処でも、何か起っても、冷静な判断と、機を誤らず、速やかに処置をすることであって、運を天にまかせて見ていることではいけないのである。財団法人全日本聾唖連盟が出来た時、その経緯を見るとろうあ者の団体に学校の先生が関係していた時には、とかく取りが悪かったようだが、ろうあ者の諸君自身立ち上って連盟を組織結成したのでこんな見事な団体に発展したのである。人に頼らないという強さがほしいのである。一般人で心身障害者の為に同情心から熱心に尽されている人は意外に多い。いずれは各方面に連絡して其の人々の列伝を作成したいと思っている。「足るを知って、以って自ら誠しむ」という言葉がある。すべてのこと謙虚に心がけたいものである。口話法の創始者西川吉之助さんと娘の浜子さんに紹介された時、すっかり感心してしまった。当時のろうあ学校でも考えてもらいたいと西川さんは全部自己負担で全国に宣伝したいから文部省もそれを認められたいと全国行脚をやられた。ところがこれは菓がききすぎて、やがて殆んど全ろうあ学校が口話法を採用してしまった。そうして従来手話法で育った卒業生を口話法教育の邪魔になるからという理由で学校へ来ることを禁止し、福祉の仕事もやめてしまった。これはろうあ者の為ではなく校長、先生達の点数をかせぐ為なのであった。其の頃私は大阪に行ったので大阪市立ろう学校に高橋潔校長を訪ね、口話法と共に手話法も大切であるとして、むしろ孤壘を守っていたのである。高橋校長と議論した。敗けてたまるかと、むしろ喧嘩腰の勢であった。然しきいているうちに、考えると私のいうことより筋が通っている。私は突然立ち上って「敗けたあ」と呶鳴ってしまった。高橋さんはびっくりしてきょんとしていた。私は敗けました。あなたは経験者、私のは机上の空論です。私は御指導に従いますといって手を握った。高橋さんは正に情熱の人、夫

人が病気で亡くなられた時も、涙をこぼしながらも学校の会に出て来られて世話をしておられた。西川さんも口話法の為に全財産を投げ出し、最後はいつまでも。高橋さんも最後まで、すべてを尽くされた。私はこの二人の人を知った事は何という幸せなことでした。此の上は何があるのか。

ろうあ文化 昭和 32 年 9 月 15 日

東海ろうあ連盟発行

【徳川さんは手話論者】 榊原、清川両氏訪問記

去る 7 月 24 日愛知ろう連榊原会長、清川副会長は総会を控え県、民生部社会課を訪問各種助成について陳情、更に関係部門を同様訪問の上、愛知県美術館に徳川義親氏を訪問した。1 階の受付嬢に刺を通じて面接を乞うと、しばし奥まった、衝立(ついたて)の陰に入った受付嬢中々お戻にならない。「あの中に徳川さんは見えるのかな」背伸びして、四角い受付窓から無遠慮に奥をのぞきこんで見るのだが、何んとなくがやがやと話し声が補聴器を通して聞えてはくるだけでとんと様子がわからない。「こりあわれわれの如き下頭の徒が突然の訪問では、きつと留守を喰うかな」と首をかしげつつ半ば諦めかけていたところえ、先程の受付嬢が、われわれの名刺片手にどうぞこちらえ……。「やれやれ」二人は顔を見合せつつ、どこか応接室へでも通されるのかな？と後にしたがつとツルツルすべる床を通過して階段を上ってゆく、やがて前方から別の制服嬢が迎えに出て来た。つまりわれわれ二人はリレーにおけるバトンタッチよろしく徳川館長室直属の制服嬢に引継がれたのである。先程 1 階の奥まった衝立の陰では、要するに 2 階の徳川館長室へ室内電話でわれわれ下頭の徒の名刺を読みあげ、徳川さんがお会いなさるか、それとも一寸多忙だからお断り……となるのかのお伺いを受付嬢が恐る恐る？ということが今にしてはじめてピーンと来た次第ではある。ツルンとトタンに身体中の血の気の模様なんとなくである。緊張しトタンに足もとがツルンときた。今更のようにきれいに磨かれた大理石の床面がウラメシクなる二度目ツルンと来た頃、やおら手前のドアをギーと(そんな気がした)開けた。こちらは直視はエチケットに反するとばかり反ば上半身を下前方へ折曲げ、

伏目勝ちに静々と二歩、三歩……やがて思いきって尊顔を??身体を起して見たら何んと衝立がデーンと構えているだけ……。ナアンダと思ったとたん、またツルンときた、完全にあがっている……。と急に眼前が実に鮮やかにパツと開けて来た、それもそのはず、当の徳川さんに相對して、花もはじらう若き美しき麗人と中年の淑女がつつましく、しとやかにござるではないか。目にしみるようなまぶしさとはこのこと、エツヘツン……。これでも会長でござるぞ!榊原氏大いにそれ身になって、かたわらの清川秘書?をしたがえて一寸リキンでは見たものの、いやはや、てんで齒が立たない。さて、

○「本日は誠に御多用中のところを突然お邪魔しまして……」

徳川さん「いやどういたしまして、どう致しまして、どうぞお掛け下さい」

これはまずい、指さされたかたわらのソアに二人共思いきって腰をおろした……はよいが完全に麗人と真正面向に相對したわけ、汗でよごれたワイシャツの袖口が急に気になりだした。どうなることか、まあ落つくことさ。

徳川さん「どうぞこれえお名前を」

御芳名簿と表記された帳面と万年筆を出された。

○「ハア」と答えて、ソアから身をおろし土下座の様な格好で(応接のテーブルは実に低いのである)ブルブルと一筆ここで初めて対談と云うわけ。

○「実は私共の中島敏之氏と彫刻家の後藤白童さんから徳川さんが、お会いして下さったお便りを頂きましたので、一度私達も“ろうあ文化”誌を代表してご挨拶かたがた又いろいろお言葉を頂きたいと存じまして」(つまり原稿のことである)

徳川さん「ああそうですか(ニコニコとうなずかれ)もういろいろと忙しく何かと思ってもどうもお約束が出来兼ねるんでねえ……」

○「いやごもつともで、別に今日明日中にどうのこうの申すわけではないんですが」

○「時に今秋豊橋市で第 7 回の総会を催すのでございますが御迷惑のこととは思いますがぜひ……」

徳川さん「いやそれがね只今も申した通り全く

予定がたたないんですよこの通りでね・・・(とつまり御多忙なんです)然し都合さえつけば勿論参りますよ・・・それで総会は何日なんですか?」

○「資金の関係もありまして大体十月の下旬と予定しているのですが・・・」

徳川さん「ああ、なるほど、今ここでお約束するということは一寸出来ないですが、とにかく大体一ヶ月前位までに一応知らせ下さらないと・・・」

○「はいこしこまりました、決定次第御願いに参りますから・・・えっと何かロウア界のことにつきまして・・・」

徳川さん「私はですねロウア者の福祉と云う点で、手真似をもっと普及しなくてはいけないと、思うんですがね・・・どうも此の地方は・・・」

○「実は私としましては難聴者ですので、いわゆるロウア者に対する、手話、口話ということについて学校教育の立場からどのように扱われているのか正直なところ私にもわからないのですが・・・」

徳川さん「口話法はですね、どうもわれわれ普通の者には発音がよくわからないからよくないですねえ!ロウア者同志にはいいでしょうが」

○「そうですねえ、そういう一面は同感ですが・・・」

徳川さん「外国などでも手真似ですが。手真似でないとロウア者の福祉にはならないですよ」

○「此の間四国で開かれた全日ろう連の大会へ出席した会員の話だとあの地方では口話法と云うことを全然知らないというんです。私は又全国的に手話から口話に移変ってきているのかとばかり・・・」

徳川さん「いや、関西地方は全部手話です」

○「東京方面は」

徳川さん「もうこんなことしたって(指文字のことらしい)私達には全然わかりこないですよ、手話を廃すんでは、福祉に反しますよ」

どうやら徳川さんは一にも二にも手話、大の手話論者のようだ、フトかたわらの麗人を眺めるともなく視線をうつすと、われわれのこんな話なんに退屈されたのか、生あくびをそつとこらえていらっしやる所らぶつつかってしまった。こりゃいけねえ、先客を無視して長居をしたん

ちゃあ・・・特に相手がレディとあつては・・・と今度は幾分落ちつきを取り戻し、初めて徳川さんの容貌に接することが出来た。世が世なら、とてもわれわれ風情ごどときがお目通り出来るどころではない。お年の割に(もう古稀を迎えられているのではないかしら)中々のお元気で直裁的に語られるお声も実にテキパキと若々しく、銀縁めがね(たしかそうだったと思う)の奥深く輝く眼光は流石にキリリツと引締まり柔和な面持の中にも知性の香り高くあたりを圧するものがある。矢張り血筋は争えぬものだ。この徳川さん故にわがロウア界がどの位引き立てられていることか、又その恩顧たるや到底筆舌の尽し得るところでないことば勿論である。然もこのような高嶺の地位にある人が手話を解し、ロウア者の福祉に限りない想を寄せてくれることは全く果報であると・・・ふとこんなことを考えていたら徳川さんの眼がギロリツと光ったような気がした、スツカリあわてた筆者

○「ロウア者についていろいろお世話下さいまして会員を代表致しまして厚く御礼申し上げる次第ですが、実は全日ろう連の大会をこの名古屋で開けと云う声が非常に多数でございますので、地下鉄と名古屋城の完成年度あたりに大会を引受けたらどうかと云う話もあるのですが」

徳川さん「それはいいですねえ、結構ですよ(と斯様におしゃったように聞えた思うが、突然補聴器の調子が悪く、はつきりしなかった)」

○「ところが何んと申しましてものは金でして、それに受入れに要する人材の点で・・・」

徳川さん「いや、それは又その時になれば、又何んとかかりますよ・・・(どうも補聴器の調子が悪い、これ又こうおっしゃった様な気がする)」

こうなると対談はサッパリである。待たせた麗人のことも考えねばならない、多忙な徳川さんをつかまえて暇をつぶすことなどなおさらである。

○「万一名古屋で大会の節は何分よろしく、ではお忙しいところをいろいろとどうも有り難うございました」と挨拶、たちあがったらツルンと来た。

徳川さん「いやどう致しまして」ニコニコと会釈された。麗人も正気を取り戻されたかの如く

一層美しく輝いた瞳でこちらを会釈してくれた。それにしても足下が危い、この一瞬ステンコン来たのでは美淑女性の手前何んともはやいい恥さらしだ。落ちつけ、落ちつけ。忍び足にも似た足取りで、しかも徳川さんの眼光背向に通ずるものを感じつつやっとドアまでたどりついて室外に出たトタン、フーツト大きな深呼吸、われわれもやっと正気を呼び戻した。何んと平凡な訪問子ではないか、今更ながら小器、大器に遠く及ばざるを痛感した次第である・・・が、こうした突然の訪問にもかかわらずお目にかかれたことが、せめてもの収穫というものであると自画自賛した次第である。

おわりに

徳川義親は、西川吉之助と出合ってから聾教育の口話法教育による改革に取り組んだのであるが、口話法教育中心に研究普及の運動が全国の聾学校への支援に伴い、展開されたのである。戦後、聾教育に対する示唆をし、氏の反省が故に聴覚障害者の福祉向上に転換して、全日本聾唖連盟総裁就任によって国への援助を働きかけていたのである。徳川義親という人物が存在したことを忘れてはならない。

【参考文献】

「聾教育百年のあゆみ」財団法人聴覚障害者教育福祉協会 昭和54年12月15日

川渕依子「手話は心」全日本ろうあ連盟 1983年3月1日

川渕依子「手話賛美」サンライズ出版 2000年10月1日

小田部雄次「徳川義親の十五年戦争」青木書店 1988年6月25日

徳川義親「最後の殿様」講談社 昭和48年9月20日

徳川義親「私の履歴書 20」日本経済新聞社編 昭和39年2月1日

ろうあ文化収録版 昭和32年9月15日付2面

第24回全国ろうあ者大会名古屋大会 財団法人全日本聾唖連盟 昭和50年4月29日

美馬常雄 「天窓」 特殊教育に生きて50年 平成5年3月20日

【付記】

川渕依子様、徳川美術館の並木昌史様をはじめ関係者各位の多数の資料をご提供いただき、貴重な資料を下さって謝意を表したい。